

# 「らしさ」概念の射程<sup>(1)</sup>

(La portée philosophique du concept de « Rashi-sa »)

村 瀬 鋼

「らしさ」は、我々の研究グループの課題「多メディアにおける「らしさ」の変容——表象文化にとって「自然さ」とは何か」のキーワードになっている。それは接尾語として名詞に付加されて「男らしい」のような言葉をつくる「らしさ」である。

「らしさ」は日本語のごく平凡な言い回しであるが、仔細に検討してみればそこには実に豊かな含みがあり、この単純な言葉のなかに、表象文化をめぐる多様な諸問題が要約的に凝縮されているのが認められる。また、西洋の言葉ないしはその翻訳語を用いて議論する習慣を持つ我々研究者たちにとって、日本語独特の言葉をあえて概念化することは、当該の研究に新たな視界を与えるものとなりうるとも期待され、実際それは一部では試みられていることでもある。だが、この「らしさ」については、従来主題的に研究された例がなかった。

この小報告の狙いは、「らしさ」という言葉の含意の明確化である。これを通じて、我々のグループの研究の展望を多少とも見えやすくしたい。

## 1 「らしさ」の氾濫という現状

現代日本の我々の日常には「らしさ」という言葉が氾濫している。「らしさ」という接尾語の柔軟さがそれを許したのでもある。だがこの氾濫は、たんなる言葉の氾濫ではなく、「らしさ」が示す世界了解および自己了解の広汎な普及浸透をも意味している。「らしい」か「らしくない」かが、広く物事一般についての支配的な判断基準・価値基準となっている。これほどにまで我々の判断を左右する「らしさ」の仕組みについて、反省が必要である。

## 2 本来性としての「らしさ」

「らしさ」への関心は、本来性 (authenticité) への関心である。実際、「らしい」とは、「本来あるべきようにある」ということである<sup>(2)</sup>。そして、ひとが「らしい」というときには、「らしい」ことへの肯定的な評価を伴っているのが普通である。だからそこには一つの道徳があり、一つの道徳から発する諸規範がある。にもかかわらず、この道徳は道徳としては見えにくい。なぜならこの道徳は自然を擬すからである。

## 3 自然性としての「らしさ」

「らしさ」はまた自然性 (naturalité) でもある。本来性が気かけられるとき、そこにはつねに、物事の「本性＝自然 (nature)」が想定されている<sup>(3)</sup>。この本性に叶うものこそが本来的なものなのである。この本性を持っているものがその本性に従うのは本来的である同時に文字通り自然的であろう。しかしこの本性は、自然科学的な不変の自然などではない。それは道徳的価値観を含み捏造や変造に無関係ではない表象された自然でしかない。(我々の課題に「自然さ」という言葉があるのは、この論点に関わっている。)

## 4 主観性としての「らしさ」

「らしさ」という言葉がその興味深い機能ぶりによって教えてくれる重要なことの一つは、上述の本来性および自然性の、主観性との関わりである。「らしい」とは、上記のような観点では、或るものがそれに相応しい仕方

あることとして理解されうるが、「らしい」とはまた、元々の助動詞としての意味あいにおいては、「…と私には思われる」「…と私にはみえる」ということである<sup>(4)</sup>。本来性・自然性とは、主観的印象の直観性、つまり「私には自ずとそう思われた」という対自的自明性に暗々裏に基づいているのではないか。

## 5 習慣性／慣習性としての「らしさ」

主観性としての「らしさ」の自然性は、身体的習慣および社会的慣習によって、創出はされないにしても形成され変造されている。自然性、自然な感じ方、それが自然だという見方を、私は社会的慣習として間主観的な仕方でも学習し、身体的習慣において定着させる<sup>(5)</sup>。感じ方、見方は、身をもって生きる、その生き方とも連関している。いたるところに「らしさ」を見つつ「らしさ」に従って生きる、そんなふうに馴致された主体が我々であり、それは実は「文化」そのものでもある。

## 6 納得のシステムとしての「らしさ」

「らしさ」に従って生きるというのは、納得しながら生きるということである。

「らしさ」は理解一般の基本的なかたちである。或る個物について、それは「○○らしい」と了解する。それは次のようなことであろう：或る個物（例えば「研二」）に、まずは一般的なものを述語づけし（例えば「研二は男である」）、その上で、その一般的なものについて想定された本質（例えば「男と

は大酒を飲むものである」)に、その個物が適合しているのかどうか(例えば「研二は大酒飲みなのか、否か」)が吟味され、その結果として、当初の仮説的な理解が裏付けられて、理解が、それ以上の要求を持たない納得として完成される(例えば、「なるほど、研二は男であるというに相応しい男である」「研二は男らしい」)。

個別的なものを一般的なものに本質を介して包摂するシステム。これは(例えばドゥルーズがそう分析したような)表象のシステムであるが、それはまた我々が一切を納得するという歴史の終着点を目指すシステムでもある。

## 7 問いの浮上

上記のようなシステムは、いわば幸福に向かうシステムであろう。しかし我々は、それでよいのだろうか、と立ち止まる。

上記のようなシステムは、「らしさ」をよしとするシステム、「らしい」ことを理想とするシステムである。しかし、一見したところでは物事の「相応しい在り方」と同義かにも思われた「らしい」とは、見方を換えれば、一つには、外見にすぎず、二つには、多メディア的な状況のなかでアマルガム的に捏造された表象にすぎない、とも言えはしないか。

本来性・自然性を自称する「らしさ」に対して、その真正さを問い質す問いが浮上する。「らしさ」一般に対して、「らしさ」ならぬ真正さを探ろうとする手探りが、そこから始まる。

## 8 外見としての「らしさ」

「らしさ」はその語源から言っても「そう見えること・外見」である。それはただそう「見えている」だけであって、そう「在る」のではない。我々が、これこそが「相応しく在る」ことだ、と思っていることは、実は「そう見えている」だけであって、我々が問題にすべき当のものの本当の「存在」は別のところにあるのではないか（日本らしいメンタリティーについての心理学的註記：日本人が「らしさ」を重んじるのは、外見を重んじるからであるのかもしれない。「男らしくせよ」と言われるのは「男である以上は、男に見えるようにせよ」ということなのかもしれない。或いはことによれば、「男であるかどうかはどうでもよく、男に見えさえすればよいのだ」ということなのかもしれない。そして、それがそう見えるのかどうかということは、当のものそれ自身による以上に間主観的な共通了解によって決まる、という具合になっているのかもしれない）。

## 9 表象としての「らしさ」

「らしさ」は表象である。表象の一典型であり、一局面であり、或る隆起を伴った表象そのものである。それは「誰かに現れる何かが、在る何かを、誰かに対して表す」という構造を持っている<sup>(6)</sup>。表象一般は事実上、多メディア的——数的にも種的にも多メディア的な——な状況のなかに置かれている。それは我々自身が多メディア的——例えば我々は、見、聴き、話し、食べ、読み、書き、動き…等々する——だからでもあるから、現代という時代の上に帰される特殊状況というわけでもない。どんな想定される自然性、ど

んな想定される本来性も、根本的には、個物と〈私〉との出会いから醸成され抽出されるしかないが、実際の状況においては、自然性や本来性は、齟齬しあい重複しあい交叉しあう多種多数の表象の効果として、その出会いから遠いところに幻想を生む。

## 10 「○○」と「○○らしさ」

我々の疑問の表現は、その一つのかたちとして、我々のグループの研究において、「○○」と「○○らしさ」との比較という実験となった（例えば「チュニジア」と「チュニジアらしさ」）。まず、多メディア的な状況のなかで本来的・自然的な在り方の表象として成立している「○○らしさ」がある。だが我々は場合によっては「○○」にいわば直に出会い直す試みをなしうる。その際に我々はただ従来の「○○らしさ」を再発見するだけなのかもしれないし、反対にそれを現実の「○○」によって完全に破壊されるのかもしれないし、また新しい「○○らしさ」を汲み出すことに成功するのかもしれない。或いはまた、タマネギのように、「○○らしさ」の皮をいくら剥いても現われるのはもう一つの「○○らしさ」でしかなく、端的な「○○」との出会いは表象の効果がひとに夢見させているだけの叶わぬ夢であることを思い知らされるのでもあるかもしれない。しかしいずれにせよまず重要なのは、「○○」と「○○らしさ」というこの両者の間に様々な隔たりがありうるということそのこと、そのありうる隔たりをこそまずは現実として再確認することである。それは納得しない生き方であり、「本当らしさ」で満足せずに、ひとを落ち着かなくさせる「本当」に指先で触れようとする生き方である。

## 11 我々の「哲学的」課題

我々の課題は、最終的にはいわば「哲学的」なものとなるだろう。我々は表象のシステムのなかで現実から隔てられ、隔てられながらもそれを不幸と思わずに納得して生きるよう差し向けられている。表象のシステムなしの無垢な生き方も無垢な現実もありはしないが、しかし一切が表象に収束してしまうわけでもない。

哲学は古代ギリシアの時代から、「現れるもの・現出 [ce qui apparaît, l'apparence, le phénomène ou l'apparaître]」と「在るもの・存在 [ce qui est, l'être]」とを区別し、前者に欺かれることから逃れて「本当に在るもの」を見出すことを目指してきた<sup>(7)</sup>。これは現代に至るまで、いろいろなヴァリエーションや逸脱を含みながらも、基本的には不思議なほど変わらないことである。

我々の試みもまた、これと別の試みというわけではない。変幻する「らしさ」たちに魅惑されながら、その魅惑をも、たんなる魅惑というかぎりでの一つの現実として確認しながら、しかし真に固い、けれども我々の生身と同じだけの柔らかさを持った現実に出会うために。

### 付論：「自分らしさ」について

現代日本の或る独特なものの捉え方として、「自分らしさ」を良しとする考え方があるが、これは一つの興味深い研究主題となりうると思われる。自分がそれに類似している自分自身、ないし、〈現れている自分〉がその忠実な現れ（表象）であるところの〈在る自分〉というものが、果たしてあるのかどうか。ひとが「自分らしさ」を言うときに生じているのは、既に、自分の



外見の底に控えているかのような自分の本性の捏造ではないのか。或いはそもそも「自分」とは、そのような捏造を含んだ上で、或る種の二重性としてしか成立しえないのではないか。とすれば、そこにはどのような捏造ないし形成のメカニズムがあり、そこに我々にとってどんな危険や好機があるのか。或いは、ことによれば、あらゆる「らしさ」とは無縁な「自分」というものが実は在って、ただ、「らしさ」に幻惑されつづけている我々には、それは気づかれにくい、というだけのことなのではないか、等々。

## 註

- (1) 本稿は、2009年11月5日、6日、成城大学を会場に、パリ第一大学教授 Dominique Chateau 氏および国立科学研究センター名誉研究指導官 Raymond Bellour 氏を招いて開催された、科学研究費補助金による国際シンポジウム「多メディアにおける「らしさ」の変容——表象文化にとって「自然さ」とは何か」の第一日目「美学的観点から」において筆者が行った報告のハンドアウトに、若干の加筆を施したものである。要約的な覚書に近いもので、十分な展開が提示されていない点については他日を期す。
- (2) 後に触れるように——また日本語使用者なら指摘されるまでもなく知っているように——「らしい」ということは元来は「…であるように思われる」「…であるように見える」ということである。ところで、もしたんにそのように「らしい」を理解するならば、「らしい」は、「…であるように思われるけれども本当は違うかもしれない」とか、「…であるように見えるけれどもそれは外見だけかもしれない」という疑いの余地を原理的には許容していると言わねばならない。ところが、我々が問題するような、「○らしい」、「○○らしさ」といった表現においては、この「本当は違うかもしれない」という可能性は、多くの場合、最初から排除されている。例えば、「彼は男らしい」と言うとき、それは「彼は男であるように見える、けれども本当は男ではないのかもしれない」ということでは全くなくて、むしろ「彼はむしろ男であって、しかも彼はまさに男であるように見える、

だから（そのことによく示されているように）彼は男のなかの男なのだ」ということなのである。

- (3) 日本語で「らしさ」に代わりうる接尾辞の一つに「性」がある。例えば「人間らしさ」は「人間性」とほぼ等価である。「性」も「らしさ」と同様柔軟な接尾語で、あらゆる名詞に付いて抽象的な意味を持つ語をつくる（フランス語では接尾辞 *-ité* に当たろう）。ところで「性」とは元来、漢語の語源から言うと「生来の在り方、自然、本性」のことなのである。
- (4) 「らしさ」がその名詞化であるところの「らしい」（古語では「らし」）は、推定（ないし推量）の助動詞であり、「…と思われる [il (me) semble que...], 「…であるように見える [il (me) paraît que...]」である。先の註で、このことは「本当は違うかもしれない」という可能性を原理的には許容していると指摘した。「原理的には」である。なぜなら、「らしい」は、この助動詞としての用法においてすら、実際にはしばしば、「きっとそうだ」「私はそう確信する」というニュアンスを伴い、「違うかもしれない」という懐疑を発動させずに機能するから。
- (5) 「第二の自然」という言い方（モンテーニュ、パスカル）。
- (6) 「表象 [représentation]」は、基本的には次の三契機からなる一構造である。1) 或る誰か、2) 在るとされる何か、3) 在るとされる何かの現れとされる、或る誰かへの現れ。フランス語の動詞 *représenter*（表象する）は、或る何か別の何かを表象する (*Qch représente qch*) という場合に用いられるとともに、或る誰かが自分に対して何かを表象する (*Qn se représente qch*、或る誰かが何かを思い描く、つまり、或る誰かが、自分の側に、何かを表象する或る現れを所持する) という場合にも使われるから、この三契機がたしかに含まれている。また「…と思われる・…と見える」の意のフランス語 *sembler, paraître* にも同様のことが言える（何かが何かを誰かに、という三契機を含んでいる）。加えて、この三契機からなる構造は、現われがそれへと与えられる誰かとは別の、現われを与える誰か、によってももちろん利用されうるし、実際に利用される。即ち、或る誰かが、在る何かの現われと資格づけられる現われを、他の誰かへと与える、ないし、或る誰かが他の誰かへの現われに何かを表象せしめる、簡便に言えば、或る誰かが何らかのメディアウムによって他の誰かに何かを表現する、といった事態がそれである。このような事態が入り込みうるのは、表象ということにとっては自然な成り行き

である。なぜなら、与えられる現われの背後に何かが想定される、という構造があるとき、その何かが誰かである可能性はそもそも排除されていないのに加え、当該の背後に、当該の現われ或いは表象がその何らかの間接的な自己表現であるような誰かの少なくとも推定的な存在を、自ずと引き込んでくるからである（日本語には、「あらわれる」および「あらわす」という言葉があるわけだが、これらの言葉の含意を解いてみることは、この一連の事柄に良好な見通しを与えてくれるかもしれない。さらに「あらわれる」の語根には「ある」が想定されることも考え併せれば、事の射程は深くに達すると期待されるが、この展開は他日を期す）。ところで、これら一連の構造は実は、「記号 [signe]」一般の構造とも言える。「記号」とは誰かに或る何かを表す別の何かのことだからであり、或る誰かの他の誰かに対する表現の媒体として機能するもののことだからである（「林檎」は誰かに林檎をあらわし、「林檎」を用いて誰かが誰かに何かをあらわす）。さらにこれは、実は「（世界内存在としての）人間」の一般的構造とも、「自己」の一般的構造とも言える。なぜなら、私が何かに出会い、その何かとの関係を了解し操作する、というのが自己を持つ人間の一般的在り方であるから（キェルケゴールは「自己」ないし「精神」を「関係自身に関係する関係」と定義している）。裏返して言えば、人々が議論の話題にする「表象」の起源は、〈私が何かに出会う〉ということ、或いはむしろ、その出会いに先立って〈私とその何かとが在る〉ということ、言い換えれば〈私にとって他なるものが存在する〉ということにある、ということになる。「表象」や「記号」について論じられる際に一般に見落とされがちなのは、それらが含む「誰か」という契機の意味である。但し、デリダの有名な指摘を待つまでもなく、「表象」や「記号」の特性は、それを受容したり発信したりする当事者の手を離れて、それら自身の戯れのなかで機能してしまう、というところにあるのだから、「誰か」という契機が軽視されるに至っているのはごく自然なことではある。しかし私の見込みでは、「表象」や「記号」の問題は、これを〈私と他者との出会い〉ないしは〈私にとっての他者の存在〉という表象・記号以前のいわば実存的な水準に一度引き下ろしてみなければ、我々にとって本当に十分な意味では理解されえない。この水準での事柄を比喩的に「表象」や「記号」という名で呼ぶのでもなければ。

- (7) 「あるもの [ce qui est]」と「あらぬもの [ce qui n'est pas]」とを区別し、また前者の探求を「思われ・臆見 [l'opinion, doxa]」の探求からも区別したパ

ルメニデス。また有為転変に満ちた感覚的なものの世界の彼方に、永遠的な真の実在である「アイデア」を置くとともに、そのアイデアの中身を、やはり「そう思われること・臆見」ではない「在ること」として探求しようとしたプラトン。その後の多種多様な観念論[idéalisme]と実在論[réalisme]とのあらゆる展開——「在ること」を「現れること」に基づけようとする現象学的な企てをも含めて。

\* 本稿は、科学研究費補助金による共同研究「多メディアにおける「らしさ」の変容——表象文化にとって「自然さ」とは何か」（基盤研究(C)課題番号 20520131 研究代表：北山研二）の研究成果の一部である。